

MIMIZ

記念号
できましたー！

～MIMIZと巡る色んな函館

私たちが創り、

私たちを創った函館～

MIMIZ

記念ロケ
してきましたー！

~MIMIZと巡る色んな函館

私たちが創り、

私たちを創った函館~

「記念号、できました！」

～MIMIZ と巡る色んな函館

私たちが創り、私たちを創った函館～

この度 MIMIZ は地域の皆様取材など
多くのご支援やご愛読いただいたおかげで
記念すべき第 10 号を迎えることができました！
誠にありがとうございます。

そして今回、感謝の気持ちを込めて
これまでの MIMIZ を振り返られる一冊を発行いたしました。

この第 10 号記念号では「函館と MIMIZ の歴史」と
「地域の魅力」、第 10 号準備号に引き続き調査した
「地域の『大人』」の 3 つの主題を設定し、
これまでの MIMIZ を振り返りながら読んでくださる皆様
にお楽しみいただける内容になっていると思います。

そして MIMIZ は、日々より良い記事を作るため、
新たな取り組みや方法、工夫を取り入れ挑戦した
歴代の MIMIZ 編集員たちの想いの結晶ともいえますが
編集員の『私たちが創り、私たちを創った函館』の姿の追求に
ご協力くださった皆様、MIMIZ を毎号楽しんでくださった
皆様と作り上げた大きな作品です。

第 10 号を通じて、MIMIZ 各号が完成するまでの
編集員たちの想い、そして地域プロジェクトという貴重な機会を
通して地域の方々と繋がることのできた奇跡と学びを
少しでも感じていただけますと幸いです。

CONTENTS

第10号記念号は歴史、魅力、大人の3つの観点から取材させていただきました。

P.1……………記念号の紹介/説明

P.2……………目次

P.3……………これまでのMIMIZの紹介

P.4～19……………歴史グループ

「MIMIZのキセキ」

函館と「百貨店」

P.20～37……………魅力グループ

「スローフード研究会」

「Cafe én」

「Buon Natale」

P.38～51……………大人グループ

「まちあるき」という生きがい

「大好きな猫を守るために」

P.52～53……………担当教員から

P.54……………奥付

これまでの MIMIZの 紹介



MIMIZ は「現場に密着して地域を見る」「物事を掘り下げて調べる」「地域に貢献できる人材となる」「活動に対し、常に前向きである」ことを意識して活動しています。

まるで生き物のミズが地中に潜ってより良い土壌を作るように、MIMIZ もこれまでテーマに沿って函館という地域をより知ろうとしてきました。第1号の「ライフスタイル」から始まり第10号準備号の「大人」まで学生ならではの観点から函館を深堀しています！

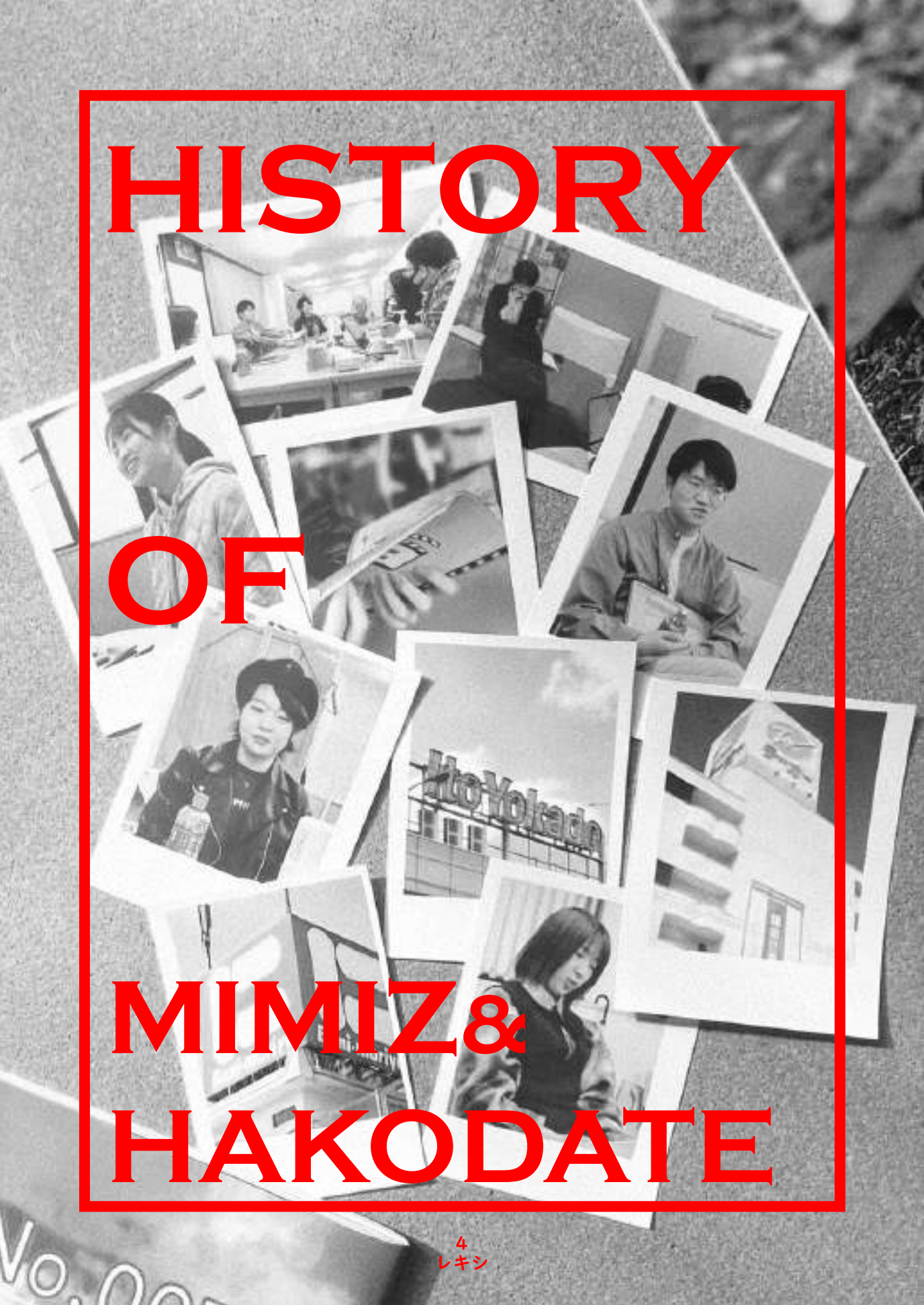
中にはきっと皆さんが知らなかった函館の姿もあるかもしれません。

個性豊かなこれまでの MIMIZ をぜひご覧ください！

バックナンバー・
最新号はこちらから！



HISTORY



OF

MIMIZ& HAKODATE

MIMIZ のキセキ

—MIMIZ の軌跡と奇跡—

宮田さんが編集長として
作成された MIMIZ 第9号
「SCOOP (スcoop)」

どのように制作されたのか
当時のことをインタビュー！



第9号編集長 3年

宮田沙耶花

ズバリ！

『地域の魅力深堀』

1 テーマの由来

このテーマの由来としては、植物を植えるときにスコップで土を掘ってから種を植えるように、MIMIZ第9号を作るために物事を掘って掘って深堀して、地域の魅力を伝えたいという思いでこのタイトルをつけました。

2 印象に残ったこと

7号編集長の町田さんにゲストで来てもらって、MIMIZに関して色々お話をしてもらったことがありました。去年どのようにして作成したのか、みたいなお話をしてもらって、そのおかげで雑誌をきちんと形にすることへの意識がちゃんと固まりました。大分ためになったなという印象がありましたね。

宮田さんは当時の楽しかった思い出を懐かしむように話して下さった。

先代編集長による

ゲスト講演

前号編集長に聞く MIMIZ 第9号制作秘話

会議の進行役として、

そして編集者として

自分の役割を果たすために多くの事を考えたという、宮田さんの強い責任感を伺うことが出来た。

記事を書いていてるところでだと、一人の記事が6ページまでだったんですが、そこに収めるという事が難しかったですね。取材をしていて書きたいことはたくさんあったのですが、雑誌という所を考えたらやはり写真を使うべきなのかなと思ったりしたり四苦八苦しながら記事を書いていました。

編集長として苦労した事というのはあまりなかったですね。各締め切りなども大きく外れることはなかったですし、皆ちゃんとやってくれました。強いて言うなら、毎週ミーティングをする上でどのようにして会議を回そうかなという所が苦労した点ではありますかね。

3 活動秘話

4 第9号の魅力

最初のうちは全員通して一個のテーマを考えるか、その方が統一感が出ていてむしろいいかなと思ったのですが、かなり早い段階で統一させない方がいいという判断に至って、その代わりちゃんと言いたいことはちゃんと掘り下げていこうという進め方にしています。

まず大きな特徴としては全員が完全に自分の「好き」に走っているという点ではないです。前期の8号の制作を経たこんな感じで作ればいいんだというノウハウが分かっている、後期は本格的に自分の得意な分野で行くというのが最大限に出ていましたね。

自分の「好き」を追求

私は元々お菓子作りが好きだったので、食品をそのまま取り上げるとただの「紹介」になってしまうので「紹介」にならない方面で記事を書いていきました。

取材先を探している間、お菓子は食べた人を幸せにしてくれる力を持っていると思うので、色々な人に食べてほしいなと考えていました。その時に小麦アレルギーを持っている方でも食べることもできるお菓子を販売しているお店はあるのかなという発想に至り、調べてみました。調査していく内に小麦粉の代わりに「こめ粉」を使用したお菓子があるという事を知りそれらを取り扱っているお店にどうしてそれを販売しているのかという事を聞いたら面白いかなと思っただけでした。

「紹介」だけの記事にならないために、ただそのお店の商品を取材するのではなく、経営している方の「思い」に目を向ける必要があつて、どうしてそのお店を開いたのかという所やお客さんで印

5 自身の記事について

紹介に留まらない
「経営している方の『思い』」
が詰まった6ページ

象に残っている人や商品開発でこういう所が難しかったとか、もちろん写真などの商品の素材も必要だけど、「この商品のここがおいしい!」とかではなくて、「この商品を作った人はこう考えていた!」という方向で記事を書いていきましたね。

当時の編集員全員が、自分自身「好き」を追求し、それを第9号の魅力へと昇華させるという熱い思いを、宮田さんの表情から感じることが出来た。

6 活動を通じて

これは「メールの書き方」じゃないですかね。自分は元々メール文化の人間じゃなくてチャット文化の人間なので本当に最初はわからなくて。言われた通りに書いてたけどこれで本当に失礼がないのかと不安になつてしまいました。メールを送った後に「改行しすぎたかな」とか「内容多すぎたかな」とかドキドキしましたね。けどそのおかげで今は結構メールをしつかり書けるようになりました。やっぱり初対面の人に送るメールは私と関わる最初の場で、それこそ第一印象を与えるものです。だからそこで失礼があつてはいけないので、その基礎をきちんと作ってもらえたのは有難いことだなと思います。

MIMIZの活動を通して宮田さんが得たという学び、その丁寧さを今回の取材を通して強く感じる事が出来る。

今に繋がった学び

第9号

宮田さんはじめ、
学生が制作した第9号は
右記 QR からでご覧いただけます。
是非ご覧ください!





No.008

Salad

MIMIZ



2021年8月

北海道教育大学函館校

道南暮らし応援プロジェクト〈MIMIZ編集室〉

ここからは！

MIMIZ 第6・7・8号の
編集長3名が初対談

MIMIZ を読むのが
もっと面白くなる
クロストーク！！



第6号編集長 4年

倉見 乙楓



第7号編集長 4年

町田 京介



第8号編集長 3年

佐藤 ことほ

「MIMIZに参加したきっかけは
何ですか？」

倉見 倉見はですね、友達がいから選んだのかなと今思い出したら思
いますね。

町田 地プロはゼミの担当の先生と
一緒にやらないといけないと勘違いし
てた(笑)内容を何にも知らないまま
何も考えないで入った。

佐藤 Gスクエアで発行しているe
ach1号の作成に半分作る側、半
分高校生のサポートの様な感じでや
ったことあるし、1番面白そうじゃ
ねみたいな感じで第一希望を出しま
した。1回MIMIZではなく別の
地プロになりかけたけど、結果とし
てMIMIZに参加する事が出来ま
した。

町田 eachはライバルだと思っ
ていた！6・7号と同じくらいの時
期に出来たから負けられないと思っ
た。

町田さんが第7号で取材されていた
HAKOMENはeach第2号でも
扱われている。なんとそのeach第
2号でHAKOMENを扱ったのは前
号に引き続き今号の編集長・佐藤が
cchだった。そして現編集長・佐藤がe
achの作成をしていた頃、第8号編集
長・佐藤ことほさんとも交流があった可
能性があった。不思議なご縁を感じるス
タートとなった。

「1番印象に残っているエピソード
はありますか？」

倉見 ちょうどコロナ禍で対面での
取材に行けた人は少なかった。私も
6号の時は全てオンラインで、7号
で初めて取材に行った。

記事関連だと7号の記事でラブホ
に行つて、断られる方が多かった。
「話を聞いてくれる人、関わってく
れた人をいかに大事にするか、失礼
がないか」に注意して取り組んでい
て……。ラブホテルに行つたというの
が今でも印象に残っています。オンラ
インでやり取りしていて、「学生が
来るところじゃないから」等の理由
でほとんどが相手にされなかった。
でも一件だけOKしてくれて、その
時は本当にうれしかった。ちゃんと
文献を読んだりして結構深くまでラ
ブホテルの事を知った上で取材した
からこそ対応してくれたのかも。

あとは「関係を大事にすること」。
ラブホはなかなか難しいけど6号の
取材先の方(夜景鑑定士の方)とは
まだ関係があったりする。SNSを
やっていて繋がったりしています。

町田 今でも仲がいい、イカダベツ
サーの記事も最初はオンラインで、
ちゃんと会えるようになったのは次
の年から。ショーに行くとかしてめ
っちゃ大人の友達が出来た。取材
以来ショーはずっと見に行ってい
る。



「関わり」について話題が上がりましたが、活動中「関わり方」コミュニケーションについて考えたことはありますか？

倉見 6・7号はメンバーが良かった。パソコンに強い人がいたり、イラストを描いてくれる人がいたり。6・7号にあるイラストもメンバーが書いてくれたものです。しかもそれぞれのメンバーのキャラクターを『どぶつの森』風に書いてくれて、それぞれのスキルが高かったと思う。どうしよってなったらばつと助けてくれるメンバーだったし、メンバーに恵まれていたと思う。男女もバランスが良かったね。

町田 ラブホテルで女子会とか交流の場をもっと設けるべきだったね。

倉見 今みたいに飲み会とか打ち上げもなかったから、喋る人は喋るけど、喋らない人は喋らない。けど「仕事で魅せます」みたいなメンバーだった。

佐藤 私の時も同じでした！静かな人の割合の方が多かった気がする。同じ地域政策グループでも名前も知ってるかなくらいの人たちしかない状況で始まりました。



記事を作ってみての印象はこの活動をきっかけに地域のプレイヤーと会えるのはめっちゃ良いと感じま

した。個人的にそれが良かったと思っ
ています。普通に大学生活を送っ
ていたら会わないだろうなという人
たちと会えたので。

その後のつながりは、私が距離的
に遊びに行けたりしていいのであ
れですけど、8号が出たときのタイ
ミングで7号で取材に行ったところ
に行って「8号ではこういうところ
に取材しに行ったんですよ」等の
話をしてキッチンカーを楽しみた
いな交流はありました。記事によっ
ては距離的な問題はあるかもしれ
ないですが、繋がりを持つと思え
ば持てました。

メンバー間の関わり方・コミュニケー
ションについて、第10号も第8号の時
と同様、お互いに面識がほばない状態
で始まった。私たちは文化祭を通じて仲を
深めたが、コロナ禍での作成となった先
輩方はそうはいかなかった。制約のある
中でメンバーと連携をとることは難し
かったと思う。しかしそのような困難を
乗り越えて、私たちの活動の目標となる
ような完成度の高い記事を作成した先
輩方に改めて尊敬の念を抱いた。

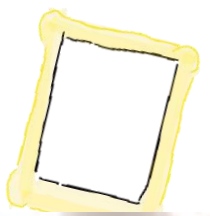
雑誌の記事の並び順について何か
こだわったことはありますか？

佐藤 8号はこの記事はとっつきや
すいな等を考えたりしていて特に苦
労はしなかったなという印象です。

町田 ほかの授業の時とかも構成の
事を考えてた。7号の時は本当に中
身がバラバラだったから、函館ロー
カルマガジンのPeepsの記事、
ラブホテル、HAKOMENの記事
をどう配置するか非常に迷った。も
し8号で最初にラブホテルがあった
らとっつきにくいかもしれないから
後ろにした。7号でHAKOMEN
を最初にしたりしたのは自分の記事
だからっていうのもあるけれど笑

この記事の中で何が1番見たくて
読まれるかなと考えたときに、当時
HAKOMENが出たてだったから、
流行りで読まれるかなと思った。
その後に雑貨などの記事を持ってき
てから、最後に自分たちが取材を頑
張っているというものを見せたくて
Peepsを最後に持ってくる等意
図はあった。後は「函館」を見ている
人と記事の対象を見ている人とで分
けたりもした。





自分の担当した号の魅力は何ですか？

佐藤 8号はまず表紙が好き！シンブルなデザインでMIMIZらしい写真を前面に使うデザインよりも満場一致でこっちの方が良いとなりました。ふわふわポップな感じが好きで、中身としては自分の好きな事の延長だったり：

クオリティ自体は9号の方が上がっているけども、8号は意外と攻めている人は攻めているなという印象。行政とかはないけど色んなジャンルがある人、食品ロスでスーパリーに取材している人、そして児童館や図書館、よさこいをしている人など身近なもので深掘りしている感じというのがこの号の色なのかなと。



1魅力の1つとしてタイトルも挙げられると思いますが、込めた思い等はありませんか？

町田 7号を「からふる」という名前にしたのは、みんなの中で色んな色を使おうみたいなものがあって、パツと開いたときに色がいっぱいあるようにしたくて、ひたすらレインボーにしたり、そういう思いが随所に出ている。テーマを考えた人も編集後記を作った人もMIMIZの予告をした人も全員違っていて。全員違った風な見た目の記事を書いたのに、一冊になると一つの本として収まったなという気持ちになった。これは多分みんなの気持ちが合ったんだろうなというのが一番の好きな部分。特に誰がこうしてといったわけじゃないけど、一瞬で決まった。コロナ禍で暗い中でも明るくしようという意図はあった。

倉見 タイトルの「画廊」というところでやはり図書館には共通してなくはないけど、美術館に入ったときみたいにいるんな作品・記事があるよねと読み取ってもらい、それぞれの個性ある記事を読んでもらうのが魅力。

6号も7号と被る所はあるが、デザイン係に広報係に、と役割分担をちゃんとしていた。割と広報が頑張ってくれていたからこそきちんと評価してもらえたかもしれない。SNSの活動がほとんどで、自分たち

でアカウントを動かして、週1で投稿しました。

一緒に作業していくうえで自分の意見を言いながらもまわりの意見も大事にしました。それぞれ担当になった仕事はまるっきり任せるけど、表紙一個をとってもバランスだとか画像を加工してもいいからもう少し真つすぐにならないかなど細かい調整は一個ずつみんなで行いました。

先ほど話題にもあがった順番にも併せて言うと、人の繋がりと部分で最後に「命」という部分で真面目な感じにしたくて、最後に猫の保護カフェの記事にした。編集後記も文字起こししてくれた人がいて、録音して必要な事と、人の喋るバランスを見ながら、出来ることをやって手探りしながらも取り組んでいました。みんながみんな仕事をしたからこそ一体感のある記事が魅力的なのかなと思う。

1編集長としてMIMIZとしての活動にかけた思いを教えてください。

倉見 「見てほしい」の一言だね。7号の編集後記にもかいたんだけど、見てもらうよりも学生がこういう活動をしているんだなと知ってもらえただけでもすごい有難い事だなと感じる。今思えば卒論も結構取材に行くけど、たかが学生に無償で大人の時





間を割いてくれていることを考えた
ら、やっぱり自分が書いた記事を見
てほしいし、取材させてくれた人た
ちへの恩返しになるのであれば見て
ほしい。自分以外の皆が一生懸命頑
張って記事を書いてくれていること
を間近で見るとし。見てもらえるこ
とで報われるというので「見てほし
い」の一言に尽きるね。

佐藤 ほぼ一緒な感じで、補足みた
いな感じになるけど、「見てほしい」
に加え、反応が返ってきたときにす
ごく実感がわいたのをすごく覚えて
いる。例えばインスタとかに上げて
いたら友達が見てくれたりとか、高
校にビラを持って行ったら先生が連
絡くれたりして。インスタとかに
上げるのを躊躇うことがあると思
うんだけどそれはすごくもったいな
いなと思っっています。自分が作っ
たものちゃんと面白って感じてくれ
る人とか価値がある、時間をかけて
作ってきたものがちゃんと評価され
て自分の自信に繋がってほしい。け
ど一番はやっぱり「見てほしい」。

町田 「悪意がない」んです。MIMIZ
には、取材している側も頑張っ
ているし、取材されている側も頑張
っている人たちだから、記事中にす
ごく努力の結晶がつまっています。雑
誌として読むにはすごい読みにくい
だろうし、パワポで作ったみたい
な文字もある。でも一生懸命やっ
たんだという所で、それぞれの記事

読んで取材先のどっか行く等しても
えたらもちろんうれしいけど、そこま
で求めないから、見たときに「ふーん
こんなあるんだ」と少しでも口角が
上がったくれたらそれでいいかなと
思うかな。

今号のMIMIZに至るまで私たちに
も共通して抱いている「見てほしい」とい
う想い。どこか遠い存在だった先輩方を
近く感じた瞬間だった。

MIMIZの活動を通して今にな
がつている事はありますか？

町田 取材にビビらなくなった。取材
先にメールを送って取材先に行っ
たときにすごく話を引き出しやすくな
ったと思う。よく先生がYTT※とい
う言葉を使うけど、そういう法則は
実践することで身につくし、はじめ
にあった人と話すことで話が弾みや
すくなったかなと思う。その人がやっ
ていることから外れたちよつとプ
ライベートな事を引き出せたら勝ち。あ
とは一つの話題として地域のこうい
う風に関わってきましたと言える。
※YTT: Yesterday・Today・Tomorrow

倉見 取材でビビらなくなったこと。
相手を気遣う言葉遣いだったり、自分
はやらせてもらっている立場なんだ
という感謝の気持ちを持ったり、初
めて会う人との低姿勢さは本当に大事

今回対談してくださった3名が
編集長として作成されたMIMIZは
下記QRからご覧いただけます。
是非ご覧ください！

第6号



第7号



第8号



だなどここで学んだし、Wordの使
い方、例えば卒論で図やグラフ等を作
ったりするけど、そこで初歩的な事だ
けど画像をグループ化して動かさない
ようにするとか、Wordをいじって
ないことと分らないことだし、今でき
ていることや取材を通しての「今のあ
たりまえ」を作ってくれたのはMIMIZ
だった。そういう部分では役に立っ
てる。

佐藤 まだ効果を実感していないけ
ど、今は出版社に行きたいというのを
考えたときに自分は今までどうだった
かなと振り返ると、やっぱりMIMIZ
Zって1つポイントになった部分だ
と思うので多分これから生きてく
という確信を持っている。



函館と「百貨店」



近年、日本各地の地方都市において大型商業施設の撤退が相次いで行われている。私たちの住むこの函館においてもそれは例外ではなく、2019年(平成31年)1月31日には函館駅前の顔とも呼ばれていた棒二森屋が閉店した。2022年(令和4年)7月3日にはイトーヨーカドー函館店が、2023年(令和5年)8月31日にはテオーデパートが閉店した。このような流れはどのようにして起こったのだろうか。

歴史を紐解きながら見ていく。



棒二森屋 の歴史

棒二森屋は「金森屋百貨店」と「棒二荻野呉服店」をルーツとしており、1936年(昭和11年)6月12日に株式会社棒二森屋として設立されることとなり、1937年(昭和12年)には函館駅前に開店し、1965年(昭和40年)には道南を代表する百貨店となった。

その後、昭和40年代後半には赤川地区が1973年(昭和48年)の函館市との合併や産業道路の整備もあり、大門・五稜郭地区につぐ新興商店街として台頭し、人口の郊外への移動とモータリゼーションの影響によって地域経済が伸び悩むなど、周囲の環境変化が起こるなか、この地区にイトーヨーカドーと長崎屋が進出し強力な競合相手が出現することになる。

1982年(昭和57年)にはこれに対抗し、当時の若者をターゲットに、新館「アネックス」をオープンしたが、この当時すでに棒二森屋はダイエーの傘下に入っており、2005年(平成17年)にはダイエー子会社である中合傘下に入り、正式な店名も「中合 棒二森屋」となっていた。2015年(平成27年)にはイオンの傘下となり、2017年(平成29年)にはイオンが棒二森屋の閉店を検討し始める事となる。この時、アネックス館にて営業していた「無印良品」が五稜郭地区に再開発ビルとして新たにオープンすることになる「シエスタ函館」に移転する事が決定した。

そして遂にイオンが、売り上げの低迷と本館の耐震性不足を理由に2019年(平成31年)1月31日をもって閉店すると発表することになる。この時、店内には来店客の思いが綴られたメッセージカードが展示されるなど長く市民に親しまれていた様子が伺える光景が存在していた。そして閉店当日には多くの人々に見守られながら、戦前から続く150年の長い歴史に幕を閉じた。

出典:「函館市史」通説編3 5編序章-2 (fun.ac.jp) 最終アクセス日(令和6年1月24日)

小池田 清六,大西剛(2018)。「棒二森屋物語 幕末から平成まで百五十年の歴史」.新函館ライブラリ

テオーデパートの歴史



出典

さらば愛しきテオーデパート 61年の歴史に幕 | NHK 北海道 最終アクセス日 令和6年1月24日

テオーデパート本店閉店のお知らせ <https://www.to-dept.com/?QBlog-20230201-9> 最終アクセス日 令和6年1月24日

テオーデパートは株式会社テオーホールディングスが運営している百貨店である。昭和 37 年に開店して以来、衣料品を中心とし、食料品や化粧品等のテナントが入居し、様々な催し物の会場としても多く利用された。五稜郭・梁川地区の幅広い世代の人々から親しまれてきた憩いの場でもある。

しかし少子高齢化による人口減少にともない市場規模の縮小が起り、新型コロナウイルスの影響によってさらに来店客数の減少や主力でもあった衣料品の売り上げの低迷が続いてしまった。この結果、令和5年8月31日に閉店する事となってしまった。

イトーヨーカドー函館店の歴史



出典

イトーヨーカドー函館店閉店 跡地は？ | NHK 北海道 最終アクセス日 令和6年1月24日

「函館市史」通説編 4 7 編 3 章コラム 57 (fun.ac.jp) 最終アクセス日 令和6年1月24日

イトーヨーカドー函館店は、昭和 55 年 9 月に隣接する長崎屋と同時期に開店した。モータリゼーションの進展する函館において、大規模な駐車場を完備した郊外型大型店という特徴を持っていた。そのため、開店後 1 か月の売上高は棒二森屋に次いでおり、道南の小売業界の競争をさらに激化させた。

しかし近年には競争が激化する中、設備の老朽化や客のニーズに対応する品揃えを維持出来なくなったとして、セブン&アイホールディングスが中期経営計画で不採算店舗を閉店させる方針を明らかにした。函館店もその対象となってしまう、令和4年7月3日に閉店することとなった。

近年閉店した大型商業施設について調べた後、私はイトーヨーカドー函館店とテーオーデパートの閉店の際に取材を行っていたという函館新聞の記者である飯尾遼太さんにお話を伺った。

Q・ 大型商業施設の撤退の要因として利用者の減少以外に何が考えられるのでしょうか？

A・ 施設それぞれの事情が異なり、棒二森屋やイトーヨーカドーでは、時代背景も違うため一概には言えないのですが、やはり同業他社との競争激化など、基本的に経営に関する事情で閉店することが多いように思います。

また、時代が進むにつれて街のにぎわいの中心が変化していることも要因の一つと考えています。イトーヨーカドー函館店は大規模駐車場を構える商業施設として美原地区に出店。函館市電の線路沿いに立地していた棒二森屋など函館駅前の百貨店に対し、市民が自家用車で移動し、買い物をする新しい流れが生まれたと考えられます。

もちろん、商業施設では利用者が減少すれば、売り上げも減少しますが、売り上げや利益の面で損をしている事（損益）も考えられ、必ずしも利用者の減という事象だけが原因ということではないと思います。

Q・ 棒二森屋やイトーヨーカドー、長崎屋は市民にとってどのような存在だったのでしょうか？

A・ 棒二は元々地元資本で始まったデパートであったことから、その年数や思い出深さなど、市民の思い入れが他とは違ったように感じます。函館市民にとっては家族で何代にもわたってお世話になった思い出の場所が無くなってしまふ喪失感は大きかったのではないのでしょうか。取材時の声としては「昔から親しんでいたから寂しい」という声や学生時代に遊びに行っていた思い出など、親世代であれば「とりあえず行けばなんでもそろった」などの声も聞かれました。

Q・ 棒二森屋、イトーヨーカドーの撤退によって市民の生活には具体的にどのような変化があったのでしょうか？

A・ 棒二やイトーヨーカドーなど大型商業施設の閉店の際には多くの離職者が出るため、函館

市やハローワーク函館などが再就職支援にあたり、就職説明会も開催されました。

人の流れに関していうと、棒二森屋があった函館駅前周辺は多くの飲食店が立ち並ぶ繁華街で、今はコロナ禍も明けて夜は観光客や市民でにぎわうようになってきました。昼間はやはり当時よりは人通りが少ないという声も聞かれます。美原地区は、イトーヨーカドーは閉店してしまいましたが、MEGA・ドンキホーテ（旧長崎屋）をはじめ、ほかにも商業施設があり、変化はないように感じます。

Q・ 今後、棒二森屋やイトーヨーカドーの跡地の活用としてどのような施設が望まれているのでしょうか？

A・ 棒二森屋アネックスは2019年1月末の閉店後も函館駅前ビルとして22年1月末まで営業し、閉館時には市民から「棒二に負けないくらい愛される施設ができてほしい」「市民の間で棒二を思い出せる施設になれば」といった市民の声が聞かれました。棒二

森屋の跡地は、ホテルやマンション、商業棟、公共施設などの複合施設として再開発事業が進められています。施設の完成はまだ先ですが、市民が望むように、そこに棒二森屋があった歴史を伝え、思い出を振り返ることができるような施設になればいいですね。

Q・ 記者として大型商業施設撤退をどのように捉えているのでしょうか

A・ やはり大型商業施設の撤退となると、少しでも早く情報をつかみ、報道することが求められます。イトーヨーカドーやテオーデパートは規模が大きく、長年市民に親しまれてきた分注目度が高いためです。実際にメインで担当した2023年のテオーデパート閉店では、なぜ閉店するのか、閉店後どうなるのか、地域への影響などを取材し、報道しました。テオーデパートに関してはすでに再開発に向けて新たな事業者が今夏にも商業施設を開業する方向で計画を進めています。

Q・ 飯尾さん自身は昨今の大型商業施設の撤退についてどのように感じているのでしょうか？

A・ コロナ禍において宅配サービスやフードデリバリーなどのサービスが充実したことや近年はネットショッピングも多く利用されるようになり、百貨店やデパートなど小売業への風当たりは年々強くなっています。こうしたことから、全国でも大型商業施設の撤退が相次いでいるのが現状です。

商業施設が無くなって寂しいと感じるのはやはりそこにあった時代やそこで過ごした時間が「いい思い出」として残っているからだと思います。特に棒二森屋での思い出に関して、年配の方に聞くと「おしゃれをして家族と行く特別な場所だった」という話をよく聞きます。

ただ、大型商業施設が置かれている状況は厳しく、どんなに市民の思い入れが強くても店舗としての存続が難しくれば、撤退という方向に進んでしまします。

私自身、最近行った百貨店というと、本町の丸井今井函館店になります。直近では贈答の品をそろえるために利用しました。ネットショッピングと違い、対面での接客でニースを聞き取って一緒にプレゼントを選んでくれ、丁寧にラッピングまでしてくれる店はほかには思いつきませんでした。そのプレゼントも丸井さんで用意した「特別な贈り物」という付加価値を持つような気がして、これが現代における百貨店の価値の一つように思います。

百貨店やデパートの利用目的が変わっている中で「百貨店」という業態がどのように時代に合わせ変わっていくかが今後重要なのではないかと思います。

最後に、私自身が函館における大型商業施設の撤退の流れについてまとめてみようと思う。

1

戦前・戦後の高度経済成長期の中、駅周辺にて「棒二森屋」等の商業施設が誕生し、街が賑わう。

2

昭和 40 年代にかけて、函館にもモータリゼーションの流れが訪れ、これまでの駅周辺ではなく美原地区への人口の移動が起こりはじめるようになる。

3

これと共に、イトーヨーカドーや長崎屋等の新しい大型商業施設が頭角を表すようになる。

4

日本全体の問題として、少子高齢化による人口減少や、それに伴う百貨店の売り上げの低迷も起こる。

5

21世紀に入り、これまでの「百貨店」ではないショッピングモールやコンビニが出現し、ネットショッピング等の新しい買い物の仕方が開拓される。

6

新型コロナウイルスによる影響で「巣ごもり需要」が急激に増加し、これまでの様に休日にどこかで買い物をするという時代と別の流れが生まれ始める。



大型商業施設が撤退し始めてしまった

取材を終えて

佐藤文音

今回MIMIZや函館の歴史についてお話を伺い、これまで自分がしてきた活動や住んでいる町についてディープな一面も知ることができました。

現在MIMIZ編集長として活動させて頂いていますが、悩みに直面することも多く、歴代編集長はどのように乗り越えられてきたのか、そもそもこれまでMIMIZ編集室はどのような雰囲気だったのか非常に気になっていました。今回のインタビューを通じてこれまでのMIMIZの作成秘話を知ることができて良かったです！

また函館について、私の父が函館出身ということもあり、撤退してしまった大型商業施設にはなじみがありました。街の人が撤退についてどう考えているか、歴史と併せて知り、感慨深い気持ちになりました。

取材に応じてくださった皆様、この度は誠にありがとうございました。

滝澤一輝

読者の皆様、この度は記事を読んでくださりありがとうございます。しました。私は函館と「百貨店」の記事作成をさせていただきました。他の記事とは少しテイストの違う内容でしたがお楽しみ頂けましたでしょうか？

今回は函館の歴史の1ページを担った棒二森屋・テオーデパー・イトーヨーカドーの3店舗に注目して記事を書かせていただき、函館新聞の飯尾様にもお話を伺って閉店時の様子やこれからの「百貨店」事業について深く考える機会を頂きました。改めまし、この場を借りて御礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

豊川遥介

記事を読んでくださった皆様、本当にありがとうございます。しました。

今回はMIMIZと函館の歴史について取材しましたが、MIMIZという雑誌がこれまでたくさんの人に支えられ、その歴史の重みを感じました。

また、函館市の歴史に関しては、私は函館市の出身ではありませんが、百貨店を中心とした歴史を知り、よりこの街が好きになりました。

今回、取材に応じてくださった皆様、改めてありがとうございます。



記事を読んでくださった皆様、本当にありがとうございました。
今後の雑誌作成等の参考になりますので、よろしければ
こちらのQRコードからアンケートにご協力お願いします。

Slow Food

Good

おいしさ

美味しく、風味があり、新鮮で、感覚を刺激し、満足させること

Clean

綺麗さ

地球資源、生態系、環境に負担をかけず、
また、人間の健康を損なわずに生産されること

Fair

正しさ

生産から販売及び消費にわたって、
全ての関係者が適正な報酬や労働条件にある、社会的構成を尊重すること

Menu

Society For Slowfood

スローフード研究会

函館の街で、スローフードについて考えている「はこだてスローフード研究会」。

スローフードが持つ可能性に焦点を当て、

今後の生活を維持していくための考え方、方法について会長の小川様
実際に現場に立たれている明井様にインタビューさせていただきました。

Cafe én.

カフェ エン

20 年前にオープンした Cafe én。

おいしい珈琲とスロウフードの店として、函館の裏夜景を楽しみながら、地元の
食材を嗜めます。スローフードをテーマにカフェを始めたきっかけや心と体が元
気になる食事空間について、拘りや魅力についてインタビューしています。

Ristorante Buon Natale

リストランテ ボンナターレ

函館の食といえばイカから始まり、海鮮に目が向けられがちです。

ですが、函館を含め道南地域には海鮮以外にもたくさんの素敵な食材がありま
す。より多くの食材に目を向けて頂くことが出来るように、函館スローフードイ
タリアンをコンセプトとする「BuonNatale」様に取材させていただきました。



10

MIMIZ
2024 NO.10

(一社) 北海道中小企業家同友会函館支部

スローフード研究会

発祥の地 イタリア

ファストフードの参入
スローライフ
スローシティ

フードマイル

正当な価値が認められる社会へ

料理術の保存

こんなところにも?!
経済原理的には正しいのでは?

言葉を知る

COLUMN

ラッキーピエロは、スローフード

みよい農園での取り組み

変革を与える

地域でとれたものを地域で循環する

アイデアから、販売へ…

家庭内でのスローフード意識
化学肥料を使わない

持続可能な社会に向けて

はこだてスローフード研究会

会長

小川聡様

株式会社 みよい

代表取締役

明井清治様



Q. スローフードの概念はどちらで生まれたんですか？

イタリアのローマです。

始まった理由としては、ローマにマクドナルドが出店することになったことにあります。

—— ファストフードの参入 ——

イタリア国内では、ローマにマクドナルドが出店することに反発があったんです。アメリカのチェーン店がイタリアに進出することによって食文化を壊されてしまうのではないかという危機感があったんです。このような危機感をベースにした活動なんです。現在は、スローライフや、スローシティのようにスローフードから派生した考え方がイタリア国内では起こっていると言われています。

Q. 実際にどのような活動が行われているのでしょうか？

食文化について学んでいます！

私たちスローフード研究会が何をしているのかというと、スローフードのスローガンとして、掲げられている「美味しい・綺麗・正しい」、これらに基づいて、中小企業の集まりが、研究会・勉強会を開いて、スローフード等の食文化について学んでいます。食文化を保存して、現代社会で持続できるような学びを行ってきました。

Q. 持続可能な食文化とは、どのような考え方なのでしょうか？

代表的なものはフードマイルです。

スローフードの考え方の一つに、フードマイルというものがあります。フードマイルは、その地域や地方で生産されたものをその地域で食べる、近場のものを中心に食べていく。このような考えです。そうすることによって、添加物がなくなったり、輸送コストがなくなります。このようなことからフードマイルという考え方をスローフードは重視しています。

正当な価値が認められる社会へ。

最終的には食糧難が起ってしまった時に持続的な食文化を形成していくことを重視していますが、生産してきたものに正当な価値が認められるような社会を作ることも目標にしています。特に、地下水の中でも供給が見込めないとされる化石水を使った農業を行っている国は、危険であるとされています。化石水は、長い年月をかけて作られてきたとても貴重な水であり、量には限りがあります。限りある化石水を汲み上げて農業をしている地域がアメリカや中東、アフリカなどにはあります。その中でも、アメリカ南部の工作地を支えるオガララ帯水層は、数十年の間に枯渇し、世界的な経済問題を引き起こす可能性が危惧されています。水源が近くにある土地を買うというよりも安い土地を買って地下水を引いてくることのほうが、効率的に良いという点で行われているのですが、何万年もかけて作られた地下水を使っていることを理解してほしいです。

はこだて

スロー
フー
ド研
究会



スローフード研究会 会長 小川聡さん

Q. スローフードとはどのような活動なのでしょう？

まずは、料理術の保存です！

「まず始めに、料理術の保存があります。郷土料理という言葉があるように、地域に根付いた料理術というものは受け継がれてきました。さらに、地域の食材を活かすこと、地域の昔からある文化を継承することが付随して、一つの活動となっています。」

こんなところにもあるんです。

「道の駅で山菜とか売ってるおばあちゃんも、実はスローフードだったりするんです。昔から採ってきている山菜っていう食材をパックに入れて、漬物のように売ったりとか、こういうところにある技術とか文化っていうのを、ひっくるめて、学んでいくのが大事だと考えられています。他にも北海道だと鹿があげられると思います。」



経済的には

正しい行動だと思うんです。

「さまざまな地域で採られたものを使用して、料理を作ることについては、間違っていることではないと思うんです。家の経済状況によっても変化していくでしょう。しかし、今後の日本を維持していくためにも食料自給率、フードマイル等の観点からスローフードは重要な考え方であると思います。」

Q. 学生はどのように関わっていけば良いのでしょうか？

スローフードという

言葉を知っていただければ。

「学生のうちから、すべての使う食材を北海道産だったり、函館産にするのは金銭的にも難しいと思います。私たちは、全てを地元で消費しろと言いたいわけではないんです。この『スローフード』という言葉、そして知識を持ってくれているだけで、今後の生活の中でどこかに活かすことができるのではないかと考えています。」



スローフード研究会の皆様が参加した勉強会での写真

【Column】

—— ラッキーピエロはスローフード？ ——

一見、ファストフードだと思われがちなラッキーピエロ。実際は、スローフードであると小川さんは語る。「当初、ラッキーピエロは、全国から食材を集めてきていたのですが、王社長はとても勉強されていました。勉強の中で、フードマイルについて学ばれたのでしょう。その結果として、少なくとも北海道の食材を集めて使わないと今後経営していく中で壁にぶつかってしまうのではないのかという考えに辿り着いたそうです。」努力をされた結果、85%ほどまで、北海道の食材を使用することができたそうだ。



「土の中に微生物の世界が確立されている。」

微生物農法の第一人者である

明井さんにお伺いしました！

—— みよいさんは、どのような植物を栽培しているのですか？

「私の農園では、とても糖度の高いカボチャを栽培しています。とても甘いカボチャなんです。糖度は、土や、地元でとれた肥料から出しています。」

—— 糖度を上げるためにどのようなことを行われたのでしょうか？

「糖度を一度あげるだけでも、農家はとても努力をします。すぐに一度上げられるのであれば、誰でも甘いものを作れるでしょう。」

—— どのような点を変化させようと考えたのでしょうか？

「土の中に着目しました。13 年くらい前から微生物に携わって、今も携わっているのですが、とても興味深い世界なんです。土が直接吸収できない糞尿などの肥料を微生物が食べ、より良い土に変化させていく。この循環がとても大切なんです。」

—— どのようなものを肥料にされたのですか？

「今は、海産物堆肥を主に使用しています。」ホタテの運搬作業を見ていた時、ゴミ捨て場の貝殻についた付着物などにアイデアを感じたみよいさん。

「地球上にあるすべてが関わった野菜の栽培がしたかった。」という思いから、海水のミネラルを活かした栽培を始めたそうだ。



◇ 明井清治さん 株式会社みよい

「くりりん」という糖度の高いカボチャを微生物農法で栽培している。



「くりりん」は糖度が 20 度から 25 度あるカボチャである。

駒ヶ岳の麓に佇むとても広い大地にみよい農園は位置しています。



貝殻など廃棄物になっていたものを飼料として使用している明井さん。当時の町長に直談判で付着物での肥料作成をお願いしたそう。

現在は第三セクターで、海産物堆肥を「ミネラルモリモリ」や「海産物パワー」と名付け、販売している。みよいさんが第一人者となったこのプロジェクトは、様々な農家さんにも取り入れられているそう。ゴミ捨て場からチャンスを見つけたみよいさんのアイデアにはとても驚かされた。

地域で手に入れたものを、地域の中で循環していく。

「他の国や、他の県から肥料や、飼料を仕入れるということも、フードマイル的には少し違ってきます。函館産といっても、肥料が他県や、海外から取り入れられていたら、循環することはいずれできなくなってしまうかもしれません。」

家庭の中で選ぶ食材も地元のものを…

「食料自給率という言葉、知ってると思いますけど、日本全体で見ると低いのに北海道は大幅に 100%を超えているんです。近い距離で採れたものを食べることは体にもいいんですよ。特に化学肥料という観点から見ると顕著に現れます。地元で採れたものに化学肥料は必要がないんです。なぜなら輸送する時間がないし、採れたてのものを食べられるでしょう？化学肥料に頼らない有機栽培の生活が今後の世界をより良くして行くと私は考えています。」

—— 現在、何か困っていることはあるのですか？

このままでは絶対にダメです。

「野菜にかかる思いや、時間、お金は数倍に膨れ上がっているのに、競りでの値段は 40 年前と変わってないです。このままでは、日本での農業に意義を見出せなくなってしまうかもしれません。私の意見としては、やはり、地域や国内で食料を維持し、国内の自然や食材を回復させなければいけないと思います。」



Cafe én

20 年前にオープンした Cafe én(カフェ エン)。
函館の裏夜景が眺望できるロケーションも素敵なこちらのカフェでは
スローフードをテーマに食事を提供しています。



ココロとカラダにやさしい食事を。

イタリア発祥の食の草の根運動であるスローフード。その土地の文化や気候など、地域性と併存しています。そんなスローフードを取り入れているのがCafe én（カフェ・エン）です。

スローフードをテーマにカフェを始めたきっかけや心と体が元気になる食事空間について、拘りや魅力をオーナーの清水道子さんにお聞きしました。

スローフードを知る。

もともと食と健康に興味があった清水さん。お店をはじめようと思ったときに何かこだわった特徴のあるものを出したいと考えていました。

“心と体が元気になる”

これは清水さんが食事空間を提供するうえで大事にしているテーマです。このテーマを念頭に置いて、まずは世の中にある食事のさまざまな考え方について勉強をしたそうです。マクロビオティック（マクロビ）やベジタリアン、ヴィーガンがその例です。その中に含まれていた一つの考え方が“スローフード”でした。季節にとれた地元の食材を使うという考え方に魅力を感じ、取り入れることに決めました。



心と体を元気にしたい。

一人の娘をもつ母でもある清水さん。アトピーだったお子様をなんとか治してあげたいと思い、調べていたところ食事が大切であることに気が付いたそうです。添加物がない・カロリーが少ない・栄養素が高い食事を追求するうちに自然と心と体に気を配るようになりました。

地元の食材とそのこだわり

カフェをオープンして清水さんは“自然農法”を営んでいた農家さんとはじめて契約を交わしました。この自然農法というのは農薬と化学肥料を一切使わずに自然の力で作物を育てるというものです。

バイオダイナミック有機農法とも呼ばれるこの農法は、世界で最も厳しい有機基準とも言われるほどオーガニック業界で一目置かれています。ドイツの哲学者ルドルフ・シュタイナーが提唱した一連の考え方は技術体系というよりも思想に近いもので、その本質は大地や生命、水などのエネルギーの循環に帰着するものでした。彼は、近代農業の発達による私たち人間の技術創出が健全な大地に根ざ

マクロビオティック(マクロビ)

穀物を主菜として旬の野菜やみそ汁など日本の伝統的な食事がベースの考え方。

ベジタリアン

基本的には肉や魚介類を食べない菜食主義者の総称。卵製品と乳製品を食べるかどうかは本人の判断に委ねられている。

ヴィーガン

肉や魚介類のほか、卵製品や乳製品などを含めた動物性由来の食品を一切口にしない完全菜食主義者。

参考 CHAYA マクロビフーズ「マクロビオティックの基本」<https://chayam.co.jp/macrobioitic/> 2024年1月27日閲覧。
Vegewel 編集部「今さら聞けない『ヴィーガン』と『ベジタリアン』の違い！」

<https://vegewel.com/ja/style/vegan-vegetarian/> 2024年1月27日閲覧。

す生命や物質の循環を止め、やがて人間や農業の域を超えてこの地球の生命を脅かしてしまうことを懸念したのです。

持続可能な未来につながるシュタイナーの理念に賛同し、農業や化学肥料を使わない“自然の力”を生かした作物を作っている、または、そういうった考え方を持っている農家さんから仕入れるようにしていました。

このように自然の力で育てられ、その時期にとれる地元のものを使用しているカフェエンですが、旬の食材だからといっていつも全てが手に入るわけではありません。今はスーパーでも低農薬の野菜や有機農法の野菜が手に入ります。メインで旬の食材を使いつつ、スーパーのものを利用することもあるそうです。

取材をして最初驚いたのは、料理に関してのこだわりを伺ったときです。食材に気を配られているのなら、調理や作る料理に対しても何か考えや工夫が詰まっていると思っていました。しかし、いざ料理のこだわりを聞くと返ってきた言葉は、「おいしければいいんです。」という言葉でした。

この一言にはしっかりと理由があります。食材が健康であれば、もう既においしいと考えているからです。清水さんは食材がもっている力を信じて、それを生かした調理をしているのです。

味噌や調味料なども手作りされているため、化学調味料を一切使わないことで、食材の本来の味を楽しむことができるのではないのでしょうか。

参考 バイオダイナミックファームトカプチ

「バイオダイナミック農法とは？」

<https://tokapuchi.jp/bio/> 2024年1月27日 閲覧。

食事環境とスローフード

料理だけがスローフードではありません。食事以外でも、環境に配慮したものを使用します。美肌弁当のお弁当箱がそのひとつです。リユースでずっと使える物になっていました。

以前は箸も繰り返し使えるものにしていましたが、コロナ禍以降は個別包装で使い捨てのものに切り替えたそうです。洗ってまた使えるものにしたという清水さんの考え方と少し変わってしまったそうですが、感染予防のためにも、今はまだお客様が気持ちよく安心して召し上がれることを一番に考えていました。そろそろコロナも落ち着いてきたため、リユースも復活させようと思っているそうです。どちらか選べるようにすることで、お客様の意識もまた変わるのではないかと思います。

また、お客様のの中にはMY箸を持ってきて

くださる意識が高い人もいることを知り驚きました。こういった意識の高いお客様が実は増えてきているそうです。そんな意識が高い方にも安心して満足いただける食事を提供しようと、清水さんもお客様の要望に沿った柔軟な対応を心掛けています。

理想は自給自足。

全部自分で野菜も作ってごみの出ない生活を送ることが最終目標だと語る清水さん。“自然に戻すこと”をコンセプトに、自給自足を理想にしていました。コロナ明けで十分なところはありますが、意識だけでもだいぶ変わり、ごみも減ると考えています。ハウス等で野菜を育てて一から提供してみたいと今後の展望について見据えていました。

実際に使用している
地元の食材
たち！



地元・函館で繋がる。

地元が函館の清水さんは、高校卒業まで函館で暮らしていました。その後上京し、一時期アメリカでも暮らしていたそうです。お子様が親元を離れる頃になって今後の自分の人生を考えたときに浮かんだのがカフェでした。お店でのイベントを通しての出会いや交流があったり、一度、函館という街から出たことで、改めていい街だと思いうようになったりしたそうです。いろいろな人との繋がりを大切にしながら、仕事で地域に貢献できることに今は誇りを感じているようでした。



お店の看板メニュー「美肌弁当」

今回スローフードを取り入れていると知り Cafe én 様オーナー・清水道子さんに取材をさせていただきました。スローフードをカフェに取り入れた理由、地元の食材や農法に対するこだわりとその魅力など、たくさん学びがありました。また、お客様の心と体に気を配るだけでなく、細部まで環境にも配慮することで、やさしい食事空間を提供するという清水さんの信念を強く感じました。

今回、魅力取材班3人で実際にカフェを訪れ、美肌弁当(上記の写真)をいただきました。色鮮やかで美味しく、素材の味を生かした華やかな味わいでした。食後、みな口を揃えて体の調子が良くなったと言っていたので驚いたのを昨日のここのように覚えています。皆さまもぜひ心と体をリセットしにお料理を召し上がりに行ってみてはいかがでしょうか。

この度は取材にご協力いただきありがとうございました。

おいしい珈琲とスロウフードの店

Cafe én

函館市赤川町 365-5 ☎ 0138-47-4333

営業時間

11:00-17:00

18:00-21:30(18:00 以降は 1 日 1 組限定)

定休日 月/火/水 ※2 月は冬休み期間





Buon Natale



道南地域の食材を中心とした

料理を提供する

函館スローフードイタリアン

今回取材させていただいたお店は函館金森ベイエリアに佇むイタリアンレストラン「BuonNatale」。

店内には目を引く大きなクリスマスツリーが飾られています。レストランの名前であるボンナターレはイタリア語でメリークリスマスという意味です。季節に関係なく一年中置かれているクリスマスツリーは食事をより華やかな時間へと変えてくれます。

こちらのお店は道南地域の食材を使用し、土地の食文化を大切にする函館スローフードイタリアンとして、料理を提供しています。

今回取材させていただいた方は、ボンナターレシェフ森智康様です。

道南地域の食材の魅力やこだわり、地域の農家の方とのつながりについてお話を聞かせていただきました。また、スローフードの取り組みをどのように料理へと何晏連づけているのか詳しくお話を聞かせていただきました。





リストランテボンナターレシェフ

森智康様にお話を聞かせていた

だきました。

スローフードイタリアンということですが、スローフードの意義はどのようにお考えですか？

地元で採れたものを使用するというのは輸送コストもかからず、短時間で届くため鮮度の良いものを使用できるということが良いと思っています。後は地域の中で採れたものを消費するというのは人とのつながりも増えるんです。農家の方に足を運ぶだけでも色々なことが発生するんです。

具体的にはどのようなことが？

食べるものだけではなく地元の特産物を使用したイベントを開催することがあります。例えば函館市内で活躍している人のライブを行ったり子供の発表会の場や年配の方のタップダンスの発表会の場を提供したりもしていました。

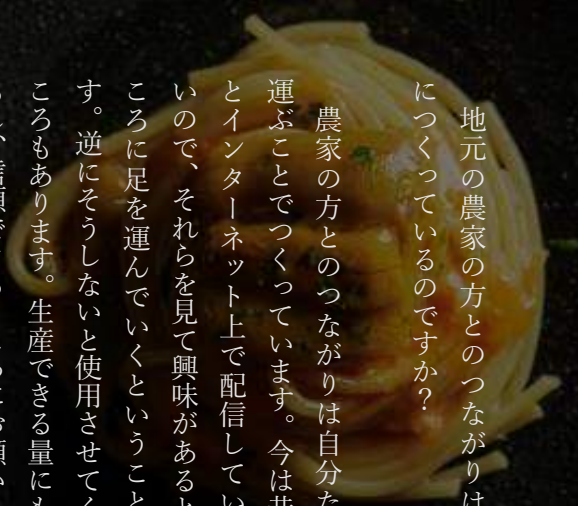
スローフードに絡めたことを行っていれば自然と生まれてくるつながりが大事だと思っています。

道南の食材の魅力は何だと思いますか？

函館の地域柄、海鮮に目が行きがちですが農家の方にも目を向けていただきたいです。道南地域でブランドをつくろうと頑張っている人たちがいるということを知ってほしいです。道南の食材の魅力としては、海鮮以外にも美味しいものがたくさんあることを料理を通して知ってほしいですね。

食材を仕入れるにあたっての基準はありますか？

料理を作る人側の気持ちのように、野菜や肉を作る人たちにも美味しいものを作ろうという思いがあるのでそういう思いを持っていて人たちが、その思いがちゃんと食材に伝わっていることが分かれば十分です。そういう気持ちを持っている人たちがつくる食材は結果的においしくなっているんです。



地元の農家の方とのつながりはどのようなようにつくっているのですか？

農家の方とのつながりは自分たちで足を運ぶことでつくっています。今は昔に比べるとインターネット上で配信している方が多いので、それらを見て興味があると思うたところに足を運んでいくということが多いです。逆にそうしないと使用させてくれないところもあります。生産できる量にも限りがあるし、信頼できる場所にお願したいという人もいるのでそういうところには何回も足を運ぶ必要があります。

提供している料理の魅力について教えてください。

会社自体がレストランの営業以外にブライダルを行っているので集客の仕方やサービスの仕方が華やかさを重視することが多いんです。目を引きやすい料理を考え、それらを道南食材と絡めて提供しています。

後は美味しいものを食べてもらいたいのを旬を意識した食材の提供をしています。

スローフードと絡めることで難しいと考えることはありますか？

自分たちが、というよりは採れた食材に合わせて作る、食器を合わせる、ということが難しいです。その年によっても雨の量とかで食材の出来具合が変わってくるので毎年同じものが出来上がるわけではないんです。海鮮も大きさが小さくなるなど、昔とは違うことも出てきます。それらを美味しく食べてもらうために工夫することがシェフとしての仕事になると考えています。

また、道南地域の食材だけで全てを網羅するというのはすごく難しいことです。全部が全部やるというのは、難しいですが極力道南地域の食材を使用しています。厳しくスローフードに沿って行うのではなく出来ることから、ということが大切だと思っています。



おわりに

函館の食の魅力を伝えるにあたって、スローフードという概念から、一度食材がどのような想いで調理され提供されているのかということに対して向き合うことが大切だと思い、今回こちらのお店に取材させていただきました。私自身も食への向き合い方を振り返る機会となりました。本当にありがとうございました。

Buon Natale

〒040-0065 北海道函館市豊川町 11-5

営業時間

ランチ／11:30～15:00 (LO14:30)

ディナー／17:00～22:00 (LO21:00)

(月曜・火曜・水曜・木曜定休)

ひりょくの
あとがき

🍄スローフード研究会様 担当 柳橋海理

読んでくださった皆様、ありがとうございます。今回私たちは、MIMIZ の活動を通して函館がもつ地域としての魅力を発信するために「スローフード」の視点から取材をさせて頂きました。このような記事を作成することが出来たのは、取材にご協力してくださった皆様、そして先生方、最後に同じ MIMIZ の仲間たちのおかげです。ご協力誠にありがとうございました。このメンバーで MIMIZ を書くことが出来るのは最後でしたが、今後も MIMIZ を広められるよう努力していきたいと思います。

☀cafe én様 担当 石川ゆい

私たちは地域の魅力というとても奥深い範疇で本号に取り組みましたが、グループでスローフードという観点に絞り、函館のまちを知ることができました。今回は取材から記事作成にあたるまですべて個人作業でしたが今回は 3 人で各取材先に行ったことで一人では引き出せなかった話も伺うことができたと思います。

デザインも表紙から裏表紙にあたるまでいろいろ試行錯誤を重ねました。結果、色が引き立つようなポップで明るい雑誌になり満足しています。デザイン担当として至らないところは多々ありましたが発行にあたりご尽力いただいた皆様、そして MIMIZ の仲間感謝しています。1 年間ありがとうございました。どうか記念号を末永くよろしく願いいたします。

🌸Ristorante Buon Natale様 担当 谷内結香子

魅力という一つのカテゴリーを設定し、函館ならではの良さを探するという新しい取り組み方によって MIMIZ 第 10 号準備号とはまた一味違った記事を作成することが出来たと思います。グループで取材先を訪問することで、1 人では思い浮かばなかった取材先の方への質問や、別の視点からの話への切り込み方があったため、記事の内容が前回よりも深まる仕上がりになったと思います。

デザインに関しては、前回とは違う雰囲気の仕上がりとなりました。色やレイアウトを 1 つ変えるだけでも一気に雰囲気が変わるため、試行錯誤しつつも楽しみながら仕上げる事が出来ました。たくさんの方にお読みいただけると嬉しいです。



アンケートへのご協力
お願いします！

『人生経験』

Knowledge of Life

あなたの人生経験を教えてください

函館を代表する地域貢献者のおふたり

「箱館歴史散歩の会」主宰者の中尾仁彦様、

函館地域猫・保護猫活動「陽だまり」代表の山口純子様

第10号準備号のテーマである『大人』を掘り下げて

『人生経験』というテーマで取材をさせていただきました。

中尾 仁彦さん

(なかお とよひこ)



中尾仁彦さん(八二)は、「箱館歴史散歩の会」の主宰者である。そして、「函館ぶら探訪(まちあるき)」の活動を一人で一六年間ボランティアで続けてきた方である。中尾さんは函館生まれ函館育ちで、昔から函館の歴史に興味を持っており、社会人時代からの趣味であるウォーキングと重ね合わせて『まちあるき』の活動になっていると話す。二〇二三年にはまちあるきの活動が、道南の郷土史研究に貢献した個人を表彰する神山茂賞に選出された。今回は、そんな中尾さんに『人生経験』というテーマで取材をさせていただいた。



**第二の人生をどう生きる
キーワードは「生きがい」**

「中尾さんがまちあるきに辿り着くまでの人生経験を教えてください。」

先に退職した先輩から言われた話ですが、退職して第二の人生を迎えたときに、一番大事になるのが生きがいです。嫌でも職場に行かないといけなかったけど、退職したらそんなことなく二四時間三六五日好きなことができる。だから自由と感じる人もいると思う。しかし、実際に第二の人生を迎えてみると行き場所がなくなってしまうのです。職場での人間関係は、上司・部下・同僚・取引先のように利害関係者が多い。この関係が仕事を辞めるとスバツと切り離されてさーっと人が引く。退職して半年もすると行くところがどこにもなくなってしまう。ここまでの話は先輩から聞いた話です。だから私は、第二の人生での生きがいを早く探して、準備期間を早め、退職してから生きがい

「函館ぶら探訪」とは

「函館ぶら探訪」(通称..まちあるき)は函館の町を歩いて郷土の歴史を学ぶという活動で、今年で一六周年を迎えた。まちあるきの活動は、自由参加で指定された時間・場所に来るだけというとても緩い参加条件で、多いときには二〇〇人以上の参加者を集めており、郷土の歴史を学ぶ場だけでなく参加者の地域交流の場ともなっている。しかし、コロナ禍に入ってから以降は人数制限を余儀なくされてしまったため、参加者の新規募集はせずに固定された四〇人程度限定で活動を行っている。コロナ禍前は地域交流の場という役割は薄れてしまったが、限られた参加者の間でより深い親交が生まれたと中尾さんは話す。また、フェイスブックを通して活動内容の発信も行っていて、参加者の予・復習の機会だけでなく、まちあるきの活動に参加できなかった人でも郷土の歴史を学ぶことができるような機会を提供している。

を採しに苦勞しないようにしようって思っていました。今は人生百年時代で第二の人生がものすごく長いでしょ。だからこそ何かやるべきじゃないと、交流の場がなくなり外にも出なくなります。やるべきがなくてテレビを友達に、さらに一日三回も新聞を見返すような生活になるかもしれない。歳ってみんなが平等に一年ずつとることが避けられないものでしょ。その意味で第二の人生も誰もが避けて通れないものだから、退職する前にきちんと準備をして迎えたいなって思っていました。私は六三歳半ばで退職したのですが、五七歳くらいから第二の人生について考え始めます。

まちあるきの由来、新聞スクラップで得た生きがい

—どうして郷土の歴史に着目されたのですか？

第二の人生では、音楽・美

術などの芸術やスポーツをやっている人は、人との交流がしやすいです。これらの趣味を持つている人は比較的、第二の人生を生きやすいんじゃないかなって思うんです。私は芸術がまったくダメでスポーツもあまり誇れるようなものはないんです。その時に浮かんできたのが小学校の頃に習った函館の郷土の歴史。元々なんともなく興味があったので、初めは函館公園にあった旧図書館で資料を読んで勉強を開始します。

その後、たどり着いた勉強法が手軽にできる新聞のスクラップでした。毎日見る新聞には郷土の歴史が書かれており、ちょっと視点を変えると歴史に繋がる記事も多いのです。毎日コツコツとスクラップをして記事クリップをファイルに入れていくと同じテーマのものがたびたび出てくるんです。例えば「土方歳三」について書かれた記事をまとめてどんどん重ね、それ以外の物は日付順に入れていく

作業を続けています。それが今では六〇冊以上になっています。昔は基礎知識をつけるためにやっていたけど、一六周年経った今でも身近にいつでも手軽にできることからスクラップは続いている。

今はインターネットでどんな情報でも手に入る時代だけど、新聞は比較的信憑性が高い情報が多く、現在もスクラップでコツコツ情報を集めて活用しています。



▲函館郵便役所跡記念碑を訪れる中尾さん



▲「函館ぶら探訪」200回 お祝いの会でスピーチをする中尾さん

郷土史の勉強を後押ししたのは

雑誌のお誘い!?

突然の出会いから始まった

まちあるきの活動

「—そもそもどういった経緯でまちあるきを始められたのですか？」
私が新聞のスクラップを始めた頃、病院の事務職員として働いておりました。ある日全く面識ない人が面会に来ます。
会って話してみると、その人は退職前は百貨店で経理をやっていた人で、道南圏の医療雑誌を作りたいが医療のことを何も知らない。医療の知識を教えて欲しいっていうことを話されました。当時は道南圏に医療の雑誌がなかったこともあり、手助けすることになった。
その準備期間中に函館の郷土の歴史を、新聞のスクラップ二年で学んだ程度にわか知識の範囲で雑談していたら、相手がその郷土の話が面白いと言うことになった。そこで医療雑誌に郷土の歴史についても連載しませんかと誘われます。年四回二ページずつ書いてくれませんか。初めは悩んだけど、せっかくの良

機会なので思い切って始めて、結果八年間続きます。当時は知識が浅く、今見たら恥ずかしい面もあるが、そういうチャンスをもたらえたことで今でも感謝しています。連載を多くの方が見てくれたことで、人の繋がりが増えましたね。
その後、無償ボランティアで函館に移住してきた人にアドバイスをする会から、函館のことを説明して欲しいということにアドバイザを頼まれます。



▲明治天皇御遺蹟と叶同館趾之碑を訪れる中尾さん

受け入れてしばらくすると、移住者が、私が書いた記事を読んでいて私が郷土史に詳しいというのを知って来ていました。それがきっかけで移住者に函館の町案内をしてくれないかと頼まれたのです。
でも私は移住者だけでなく、函館市民との交流を深められるように誰でも参加できるようにしたいと話します。すると、「願ってもないことですよ！」ってことになって話がトントンと進んで、まちあるきの活動が始まりました。
初回の活動は二〇人くらい集まったかな。広報は北海道新聞と函館新聞に載せてもらった行事案内の広告だけで、第二回以降も同じように広告を載せたら三〇人くらいすぐ集まって、あつという間に半年くらいで一〇〇人になった。この活動は自由参加で、決められていることは時間と行く場所だけ。

参加者がどんどん増えて、天気が悪いときは八〇人くらい、多いときで一五〇人も来てくれた。沢山の人が来てくれる反面、人数が多くなることで説明が聞こえない人が出てくる。参加者に対して申し訳なく私自身も消化不良になるんです。

**まちあるき主催者が語る、
まちあるきの裏側とは：**

―まちあるきの活動で一番大変なことは何ですか？

準備が一番大変。当日の二時間半が一番楽！そこに至るまでの準備がやっぱり大変だね。例えば、石川啄木が関連する西部地区を歩くというテーマにした場合、まずは石川啄木に関連する資料を探すことから始める。

次に訪問先を十数カ所に絞り、二時間半で歩けるかを考えてから実際に歩く道

筋を決める。実際に歩く場所を下見して時間を計ったら準備は終わりです。あと、私は自分の言葉で伝えたいから原稿は作らないようにしている。原稿がない分頭に全部入れないといけないから負担は大きい。原稿を読まざるを得なくなったら活動をやることも考えている。



▲東本願寺函館別院を訪れる中尾さん



▲NHK函館放送局誕生の地放送記念塔を訪れる中尾さん

―まちあるきを一六年やられていて、その期間でやりたいなと思ったことはありますか？

活動を二〇〇回も続けていくと、新しいテーマや訪問先がだんだんなくなってきたいて、このまま続けても良いのか、続けたいけどどこかでやめざるを得ないのかなという悩みはあります。「五、六年前のテーマでももう覚えてないから良いよ！」って言ってくれる

参加者もいるけどね…。参加者が減ったらまちあるきをやめる一つのきっかけになるかなって考えているけど、減るところか参加したって声をかけてくれる人が沢山いるので、今の活動を当面継続したいね。人は来てくれるが、新しいテーマがない。ある意味贅沢な悩みだけど、こういうことで自問自答することが多いかな。



▲市電を貸し切り函館大火の講和を行う中尾さん

―印象に残った参加者はいますか？

そうだ！これは話しておきたかった。四年前に中学一年生だった子が参加し、最前列で他の誰よりもメモを取ってほとんど休まなかった。今は高校一年生、その子にある日「相変わらず熱心だね」と話しかけたら「自分のまちの歴史を知らぬは恥だ」と言い切ったのです。今までまちあるきで延べ一万人以上の人に出会ってきたけどこの子が一番印象に残っています。

まちあるきを主催する中尾さんの立場から見た、まちあるきの存在意義とは

―まちあるきの原点は何ですか？

実は私の趣味のウォーキングです。ウォーキングはバカが付くほど好きなんです。オランダに行って四日間、二〇〇キロ歩く大会にも出たことがある。

退職後は東海道など江戸五街道を一人で歩きまわした。当時ほどでもないけど今でも一日一時間以上は続けています。

―まちあるきを始めて新たに得られたことや学んだことはありますか？

第二の人生で縮小気味になる人間関係を広げることができたということです。まちあるきを通して広く深く、交流の場が増えて多くの人々と出会うことができました。

先に話した利害関係のある職場とは違い、職場では得られないより深い人間関係を作ることができたのが一番です。

―中尾さんにとってまちあるきとはどんな存在ですか？

まちあるきを始めなかったら、退職してから生きていけなかったんじゃないかとつくづく考えますね。まちあるきがある生活の一部になっているのです。



▲函館水天宮を訪れる中尾さん

よ。一日に四、五時間くらいは資料を読んだり復習したり歩くコースを考えたりしている。その意味で一日の生活リズムの中には確実に入っている。

二年前に家内が亡くなった今は一人暮らしだけに、一人だと余計に生活の習慣・サイクルが大事になるから、もしまちあるきをやめたら生きがいがなくなってしまうんじゃないかと不安がよぎります。

自身の人生経験から考える、中尾さんの生き方・考え方とは

―中尾さんが生きる中で大事にしていること、信念のようなものはありますか？

「攻撃は最大の防御なり」です。攻めないと勝てない、興味あることにはどんな突き進んでいかなないと成功しないと思う。

私は生まれつき情報集めが好きで、サラリーマン時代にも情報を誰よりも多く集めることに必死になっていた。積極的に前に突き進むという意識を持つことが大切なことです。

―今までの人生を振り返ってみて、ターニングポイントはいつですか？

私は働いていたとき、転職を経験しています。当時は終身雇用が普通の時代だったから私はある意味異端児だった。東京で就職して四年間サラリーマン生活、



▲旧相馬家住宅を訪れる中尾さん

その後Uターンで地元の函館に戻ってきました。そこで次に務めた会社が倒産して一年半の失業を経験します。その後、最後に務めることになった病院の業界に入ったのです。最初は医療のイも知らず苦労しましたね。

やる以上には上を目指し、頑張って働き続けていたら、ある日、中堅病院の事務長になれる機会が訪れます。私は当時大きな組織の

中にいるよりは小さくても組織のトップで人を動かしたいと思っていたので、ひとつ賭に出てその病院の事務長になるという道に移ったのです。

結果論になるが、自分がトップになって組織を動かす、多くの人の協力を得た結果、病院の経営が大きく改善して自分の働きが認められたことが、ターニングポイントかな。

―賭に出たと話されていますが、何か成功する自信はありましたか？

おぼろげながら自信はありましたですね。病院の経営状況を分析してみると現状は極端に悪く標準レベルにほど遠い存在でした。そこでまずもって標準レベルまで持ち上げることを第一の目標としたのです。

多少の時間は要しましたが数多くの改善点を地道に修正していくと徐々に目に見えて成果が表れ始めました。すなわちレベル以下のものを標準まで上げること

にはそれほど負担にはならなかったのです。その後それらを成し遂げた暁に次の高いステップを目指し、運よく成果を出せました。足を踏み入れなければ成功しなかったのですから、自信も必要ですが積極的に前に進もうとする気持ちがより大事ですね。

―最後になりますが、中尾さんはご自身ことを大人だと思われませんか？

うーん。(笑) 今までたくさん取材されてきた中で初めて受けた質問だからびっくりしているけど、意外と幼稚ですよ。何を持って大人と判断するのかは分からないが、年寄りになると子供に返るってよく言いますよね。一方、頑固になって悪いところも出るだろうと思います。退職して利害関係が薄れていくので、ある意味好き勝手やれたどこかで純粋な子供の頃の気持ちになればと、密かに思っています。

取材を通して

私は、今回の取材を通して第二の人生での生きがい、大切さやそのための準備がいかに重要であるかを学ぶことができた。まちあるきの大変さや中尾さん自身の人生経験をお聞きする中で、何度も挑戦を繰り返して前に進み続けるという中尾さんの姿勢がとても印象に残り、私のこれからの人生に生かしていきたいと感じた。そして、中尾さんのように常に先を見て行動でき、後悔のない選択ができるような人間になりたいと思った。



NPO 法人 陽だまり

代表 山口 純子さん

函 館で地域猫活動を行うNPO法人「陽だまり」代表 山口 純子（やまぐち じゆんこ）さん。失敗を恐れず、前向きな気持ちを持ち続ける姿勢はこれまでの人生経験によるものだそう。人とも動物とも不思議な縁で結ばれ、愛に溢れた人生は山口さんの愛情深い人柄を形作った。しかし、そのような人生にも、もちろん困難は沢山ある。山口さんは困難の多い状況下における密かな楽しみを見出し、暗い空気を吹き飛ばした。普通であれば落ち込んでしまうことにも負けず、楽しんで、周りの人も元気づけたそう。この明るさと強さの源はどこにあるのか。これまでの人生、「陽だまり」を創設する背景となったできごと等々、山口さんのドラマの様な波乱万丈な人生経験をインタビューから辿っていく。

『陽だまり』とは？

NPO法人「陽だまり」は野良猫の増やトラブルを防ぐため、「野良猫を捕獲（トラップ）」「不妊・去勢手術（ニューター）」「元の場所に戻す（リターン）」の3つの行動、通称TNR活動を行っており、地域と猫の共生を目指す。元は市民グループだったが、法人化したことで行政との連携や函館市内全域・近郊での活動が可能になった。NPO法人として地域猫活動をしているのは「陽だまり」だけ。猫の数が増えている現在、依頼件数も増えているそう。また、2023年から保護猫の譲渡会やマルシェを初開催し、新しい取り組みも行っている。愛する猫が人間と共存できるように尽力する「陽だまり」の今後の活躍に期待が高まっている。

まるでドラマ?!

「今」を強くした 出会いと困難

山

口さんはご自身
でおっしゃられて
いるように前向き
な性格だ。失敗してもあ
まり落ち込まず切り替え
が早いそう。しかし生
まれつきこの性格ではな
かったという。

山口さんは子どもの
頃、家庭の事情で家族
の間で見えが食い違う時
期があった。皆も大切な
家族であるのに、と布団
を被って泣いていたこと
もあったそう。山口さん
は当時を振り返って、
比較的楽な家ではあった
がやはり落ち込んだと述
べる。お話されている表
情からその辛さが伺え
た。

そして社会人になり、
25歳の時にお見合いを
経て前夫となる男性と出
会う。前夫との結婚は一
見幸せなものに見えた。
しかし、山口さんにとつ
て必ずしもそうではな
かった。一歩も外に出られ
ないほどのストレスを抱
えることになった。仕事
に就けるほど回復した
が、復帰後も困難は続い
た。山口さんは借金の保
証人になったため、差し
押さえた紙を貼られたそ
うだ。本当にドラマのよ
うに貼っていかれたそう
だ。その後勤めていたス
ナックのマスターを引き
継ぐこととなる。

山口さんがスナックの
ママとなつてから常連と
なつた客がいた。実はこの
客こそが後に夫となる男
性であり、山口さんはこ
の男性と再婚することこ
なる。しかし結婚後、山
口さんは自宅の階段で転倒
し、大腿骨を骨折、入院し
てしまった。そんな最中
ご主人が交通事故をおこ
してしまい、同じ病院に
入院することになった。
ご主人の怪我の状態はあ
まりに深刻で、山口さん
が希望された自宅介護に
至るまでに1ヶ月もの時
間を要した。その後両親
や叔母の介護もしながら
ご主人の介護を約25年
の間、24時間行つた。疲
労から山口さんの体も、病
に侵されてしまったが、
自分だけの楽しみを見つ
けながら介護していたた
め、楽しかったそう。

山口さんがご自宅で飼われている愛
猫、みかんちゃん(右)としーちゃん(左)。
みかんちゃんはみーちゃんの愛称で
『陽だまり』の皆から愛されている。「可
愛い」と言われすぎて自分の名前を「可
愛い」だと思っているとか...

しーちゃんは艶のある毛並み特徴。
山口さんのご自宅に来た人全員の膝に
乗って動かない程人懐っこい。取材中も
私たちの傍から離れず、沢山撫でさせて
もらった。



『経験をしてきたから 大概のことは怖くない』

これまでの山口さんの人生経験は今の私達では想像できないほど過酷で圧倒されてしまった。私達だけではない、これまで山口さんの経験についてお話を伺った人は皆驚くそうだった。このような誰もが驚くような衝撃的な人生経験を通じて、山口さんは壁にぶち当たっても頑張れば大丈夫、何とかなるという気持ちを持つことができたようになった。『失敗を恐れず飛び込み、失敗したらまた気持ち切り替える』『経験しないといけない』『この山口さんの考えは今の山口さん』の活動に繋がっている。

山口さんは子どもの頃から怪我した野良猫等とよく巡り合うそうだった。物に囲まれた生活が当たり前の山口さんは、猫が良猫の被害によって猫が嫌われて欲しくなかった。た。しかし保護猫活動は気軽に始め、終わらせられるものではない。驚くことに猫は生後6ヶ月程で妊娠でき、野良猫の場合、一匹の母猫が一生で産む子猫の数は50匹以上にもなるそうだった。函館山では子猫を食べてしまうきつねの数も減っていないため、野良猫の数は日に増えている。そんな中で野良猫に不妊・去勢手術を施すことや保護が追いつかず難しくなる。さらに函館市内でも野良猫の保護団体は存在しているが、各々100匹以上保護猫を抱えているそうだった。多頭飼育で壊れてしまった組織もある程で、その負担の大きさは図りしれない。しかし山口さんはご主人が亡くなっただけで、野良猫を増や

ささない為に地域猫活動の世界に飛び込んだ。これまでの経験で培った「失敗を恐れずとにかくやってみよう」というご自身の気持ち。が突き動かしたのだ。

病院で手術措置された猫は耳にカットを入れる。一般的に縦にカットを入れ、桜の花びらの様な形になるため「さくら猫」と呼ばれることがある。オスは右耳、メスは左耳にカットが入る。



オス

メス

現

現在、昼夜を問わず野良猫の保護に関する電話が鳴る。加えて2023年から始まった譲渡会で迎え入れが決まったご家庭へ猫を連れていく、きちんと迎え入れる準備ができているかを確認する等沢山の仕事があり、お忙しい日々を過ごされている。取材の中で「人生において無駄なことは一つもない、最後には何とかなる」というお言葉を何度も聞いた。人生経験で学んだことは失敗であろうと無からうと全てその後の糧となる。山口さんの現在のご活躍を見ているとそれがはつきりとわかる。これまでの辛い経験の数々から「この時の経験に比べたら今回のことなんて平気だ」と思えるようになってしまったため、周りから何か言われても大抵のことには恐れることなく飛び込める勇気が湧き出てくるのである。例えば失敗しても「いつまでも落ち込んでいてもしょうがない」、その気持ちも胸に前を向き続ける山口

さんの姿は私たちに勇気を与える。特に失敗することや多く、一度失敗するとその失敗に囚われ、心で打たれた。万が一失敗を考へ、備えることは必要であるが、まずは勇気を出して飛び込んでみなければ始められない。一つ多々あると思う。いつもでも踏み切れないまま、敗走を恐れ、朝一夕で実践に移すのは一朝一夕では難しいが、「失敗してもこの経験を次に繋げる」ということを身近な小さなところから意識的に取り入れていきたいと思う。

野良猫から地域猫へ

『陽だまり』のお仕事の中心である TNR 活動はまず野良猫を確保することから始まる。確保するための下準備から使用する道具、その後猫はどうなるのか山口さんに教えて頂いた。



実際に使用されるトラップ。ペダルが踏まれると扉が閉まり、猫を捕獲できる。

野良猫を捕獲するにあたり、まずはエサを与え、人間に慣れてもらう必要がある。ある程度慣れたらトラップ内にエサを配置し、猫を誘導・捕獲する。その後病院で処置を施し、完了したら元の場所に返されて地域猫となる。

愛玩動物飼養管理士の資格獲得と NPO 法人の立ち上げにより、病院からの協力が得やすく現在では函館公演のほとんどの野良猫が処置済だそう。「単なる動物好き」ととどまらない活動に注目が高まる。

自分は

「大人」？

それとも

「子ども」？



インタビュの最
後に第10号準備
号の主題であった

「大人」についてお話を伺った。山口さんは自身のこと「子ども」だと感じるそう。つい正直に思ってしまうことがあろうという。他にも子どもという一面があるらしく、周囲の方から指摘を受けることもある。そして『陽だまり』活動中も度々困難に見舞われるが、多くの仲間を支えられて乗り越えている。これは「自分は周囲の人間に恵まれてる」と感じているそう。

山口さんは自身を子どもだというのが、周囲の人に恵まれてると感じられる点で私たちが考える「大人」に重なる。「子ども」のような一面がありながらも「大人」の視点をもちながら活動している姿勢は周囲の人々からの親しみと尊敬を集めている。『陽だまり』メンバーの方にお話を伺う機会もあったが、皆山口さんを理事長として頼り、しかし自分の役割を果たして活動のサポートをしていきたいと考えている。毎日地域猫にご飯やり等をしていく中で、初めは活動のに反対する声もあった。しかし、現在『陽だまり』が成果を挙げているのは山口さんの人柄によると思う。山口さんの動物への愛情はもちろん、これまで経験による明るさと決断力は仲間を惹きつける。そして山口さんの「子ども」っぽさがよりリーダーとして魅力を高め、組織をさらに発展させていく。例えば『陽だ

まり』が今まで行ってきた活動内容に留まらず、新たな取り組みを積極的に進めるのは山口さんの「失敗を恐れずとにかく体験してみる」精神が反映したものではないだろうか。そして自分の経験は自分だけではなく、その先々で出会った人々にも影響を与える。それが人を惹きつける魅力、つまり人としての厚みとなるとお話を聞きながら感じた。

取材を通じて



今回の取材で保護猫活動を知るだけでなく、自分と

違う視点に触れながら人生経験について考えを深めることができた。私は山口さんの様に失敗を恐れず、大きな世界に飛び込める自信もなければこれまでそのような人に出会ったこともなかった。お話を聞いて山口さんが格好良く、自分も将来そうなりたいと思った。現在の自分の未熟さを感じつつ、これから行動力や勇気を身に付けるために何をしたらよいか考えられた貴重な機会となった。これまで、そしてこれから経験することはきっと。山口さんが沢山私たちに話してくださったように人生に無駄なことは無いのである。

／／／／
初開催！

譲渡会&マルシェ

今年『陽だまり』初の譲渡会が開催され、その様子を見学させていただいた。私たちが見学した譲渡会では8匹の猫が譲渡に出ていた。病を抱えている猫もいるためただ譲渡するのではなく、きちんと迎え入れる準備ができているか確認した後譲渡する。そして猫が罹る「猫エイズ」についての説明等、保護猫を迎えるにあたり、知識を身に付けられるような資料も配布していた。猫も受け入れ側も安心できるようにになっている。



マルシェでは『陽だまり』の活動に合わせた出店に加え、外部の出展者をお呼びし、2日間に渡って函館の「猫好き」が交流した。猫の譲渡会や『陽だまり』の活動の紹介、地域猫活動の必要性和注意点、地域猫活動に関する助成金制度の説明会が行われ、地域猫活動のあり方が学べた。また『陽だまり』が活動中に撮影した猫の可愛い写真の展示、猫好きの出展者による多種多様な出店で和気あいあいとした幅広い年齢の方がこのマルシェを楽しめるイベントとなり大盛況だった。



大人グループの あとかき

渋谷陽介

記事を読んでいただきありがとうございました。私たちは前期の活動の延長として『大人』というテーマを掘り下げ、「人生経験」に着目して記事の作成に取り組みました。今回は前期とは違って複数人で1つのテーマを担当したため、テーマ設定から取材までの作業が計画的に進み、記事の作成に多くの時間を割くことができました。そのため、前期よりも内容に拘った記事を作成できたと思います。私は主に中尾さんの記事の作成に携わりました。中尾さんの記事を読んで、読者の皆様にも《生きがい》の大切さを感じていただけたら嬉しいです。

また、山口さんを取材させていただいた際、人生経験のエピソードの壮大さに圧倒されて取材後は一つの映画を見たような感覚になりました。そして、取材を通じてお二人の人当たりの良さや人を惹きつけられる魅力が伝わってきました。

取材にご協力頂きました中尾様、山口様、ありがとうございました。

佐藤文音

今回私はこの「人生経験」についての記事のうち、主に山口さんの記事を作成させて頂きました。何度も取材時の録音を聞き、お話を振り返る度に、「もし自分が山口さんだったらこの困難にどう立ち向かうか、乗り越えられるか…いや自分には無理だな」なんて考えていました(笑)また、イベントにもお邪魔させて頂き、楽しく記事を作成することができました。そして「陽だまり」の活動見学だけではなく、MIMIZとして外部イベントに参加させて頂くという貴重な経験をさせて頂きました。誠にありがとうございました。

中尾さんにつきましても私の最も興味のある学習分野である観光に密接に関わる「まちあるき」について、貴重な現場の声を聞かせて頂きありがとうございました。お二方のお話は私を含め大学生全員の心に響くと思いますので是非多くの人に読んでいただきたいと思います。

ご協力

「箱館歴史散歩の会」主宰者 中尾 仁彦 様

Facebook : <<https://www.facebook.com/hakodateburatanbou/>>

NPO 法人 函館地域猫・保護猫活動「陽だまり」代表 山口 純子 様

HP : <https://hakodatediary.com/hidamari_cats/>

Ameba : <<https://ameblo.jp/hidamari-20210301>>

X (旧 Twitter) : <<https://twitter.com/hidamari2021>>

アンケートへのご協力を
よろしくお願いします。



MIMIZ 第 10 号記念号の発刊にあたり、MIMIZ 編集室（北海道教育大学函館校地域プロジェクト「道南地域くらし応援プロジェクト」）の指導教員として、2019 年 3 月の第 1 号発刊以来、取材等にご協力いただいた皆さま、ご支援いただいた関係者の皆さま、そして、読者の皆さまに心より御礼を申し上げます。その上で、今回の第 10 号記念号の発刊をもちまして、学生によるローカルメディアとしてのミニコミ誌の企画・編集・発行を主な活動内容としていた MIMIZ 編集室の活動に一つの区切りを付けることをご報告申し上げます。

この機会に、MIMIZ 編集室こと道南地域くらし応援プロジェクトの、教育・研究や社会的な取り組みとしての意図、到達点/到達しえなかった点について振り返りたいと思います。

2018 年の北海道教育大学函館校における国際地域学科のスタート、特に原則として全ての学生と教員が参加する必修の授業科目としての「地域プロジェクト」の設定は、大学も含めた学校教育への「課題解決型」の教育（大学においては研究も含む）の導入という政策的・社会的な潮流の中にあつたと一般的に理解されるものと考えられます。しかし、その「課題」は、東京と地方・地域という〈中央・周辺〉関係の中で、主に「中央」の政策や情報発信によって設定されがちであり、そのことに地方・地域の学生や市民はあまり疑問を持たなかったのではないかと、また、そもそも課題の解決の仕方はその課題の内容や設定のされ方で 8 割方決まってしまうのではないかと、という問題意識を強く持っていました。

地方・地域が自らの手で課題を設定し、自らの主体性で解決していくためには、「地域の/地域による/地域のためのメディア」が必要であり、このようなメディアと、これを担う学生を新しい国際地域学科の中で生み育てたい——という気持ちが MIMIZ 編集室こと道南地域くらし応援プロジェクトの出発点です。将来、学生が市民として、あらゆる職域や地域の、どの

ような環境の下でも「メディア」としての役割を果たせるよう、MIMIZ の取材や編集では、あえて汎用的・一般的な機材やソフトを利用したことも、一つの教育上の特徴であったかもしれません。

MIMIZ の到達点については、まずは、MIMIZ の誌面からご判断いただく他ありません。到達しえなかった点としては、「編集室」というサークルぽさを感じる愛称を付けてみたものの、学生の側での地域プロジェクト＝「授業」という認識を変えるのは困難であったこと、また、多くの学生には、既存のメディアや学校教育が「正解」とする「まちづくり」や「地域活性化」というモデルを相対化するまでには知識や実践の蓄積がなく、地域の内在的な視点や価値観による課題の設定、もしくは、可能性の発見が困難であったこと、が挙げられます。

一方、MIMIZ 編集室に集まった学生は、既存のメディアや学校教育が必ずしも光を当てていないが、地域や社会の中で「一隅を照らす」ような取り組みを行っている市民や組織を取材することが、取材先の人々を encourage、empower し、そのような記事の集合体である MIMIZ が、自分たちが理想とする地域や社会を「編集」＝形成することになる、という経験も感動も得てきたはず——この記念号に学生が設定したテーマに含まれる「私たちが創り、私たちを創った函館」という文言がその証明であり、紛うことなき MIMIZ の到達点であるといえるでしょう。

（畠山 大/北海道教育大学函館校教員）

この度は、MIMIZ10 号をお手にとって頂き有難うございます。ミニコミ誌 MIMIZ を 10 号まで継続して発行することができたのも、取材にご協力頂いた皆様、読者の皆様をはじめ、様々な方々に学生の活動をサポートして頂いたおかげです。深く御礼申し上げます。

MIMIZ の発行は、若者の目線で捉えた「地域」を発信するため、本学 2 年生の必修科目である地域プロジェクトの活動の一環として行ってきました。地域プロジェクトは「地域で活躍する上で必要な実践的課題解決能力を養うために、2015 年度に新学科全学生の必修として新設された地域課題解決型 PBL（「Problem Based Learning」&「Project Based Learning」）科目」です。本学では 40 以上のプロジェクトが実施されていますが、そのなかで、本プロジェクトの特徴は、そもそも「課題解決」に取り組むにあたって必要な「テーマの発見」と「ネットワーク作り」から、完全に学生主体で行うことです。このことは、学生が以下の二つの力を培うために重要であると考えております。第一に、自分が普段何気なく住んでいる地域を意識的に見つめ直し、「当たり前」の暮らしに潜む驚きや発見に気づく力です。第二に、取材を行うにあたって、取材先の皆様にご協力をお願いし、地域での交流の輪を広げていく力です。実際、授業科目としての地域プロジェクトを履修し終わっても、学生が取材にご協力頂いた皆様と個人的に交流を続けているケースもあります。本プロジェクトの活動を通じて、広く地域の皆様に学生を育てて頂いていると、心強く、またとても有難く感じております。

来年度以降の本プロジェクトの活動では、MIMIZ の趣旨はそのまま継承しつつ、これまでのようなミニコミ誌の発行ではなく、シンポジウム等のイベントを行うことを計画しております。情報を発信する学生と、情報を受け取ってくださる皆様の間の意見交換を行う場を設けることで、今までの活動を発展させる意図があ

ります。地域に住む若者の視点から、「くらしやすい」地域とはどのような地域なのかを問題提起していく予定です。どうか今後とも皆様のご指導・ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

（藤井麻由/北海道教育大学函館校教員）

取材先一覧

函館新聞社記者 飯尾遼太様

スローフード研究会会長 小川聡様

株式会社みよい代表取締役 明井清治様

一般社団法人北海道中小企業家同友函館支部事務員 春菜孝明様

Cafe én オーナー 清水道子様

Ristorante Buon Natale シェフ 森智康様

「箱館歴史散歩の会」主宰者 中尾仁彦様

NPO 法人函館地域猫・保護猫活動「陽だまり」代表 山口純子様

第6号編集長 倉見乙楓様

第7号編集長 町田京介様

第8号編集長 佐藤ことほ様

第9号編集長 宮田沙耶花様

※順不同

ご協力いただき誠にありがとうございました。



アンケートへのご協力
お願いします！

編集室員

編集長 佐藤文音

副編集長 滝澤一輝

デザイン 谷内結香子

石川ゆい

広報 渋谷陽介

豊川遥介

学祭企画 柳橋海理

指導教員

畠山大

藤井麻由



X(旧 twitter)

<https://twitter.com/mimiz362>



Instagram

<https://www.instagram.com/mimiz362/>

MIMIZ 第10号記念号

「記念号、できました！」

～MIMIZ と巡る色んな函館

私たちが創り、私たちを創った函館～

2024年3月1日発行

北海道教育大学地域政策グループ地域プロジェクト

道南地域くらし応援プロジェクト MIMIZ 編集室

〒040-0857 函館市八幡町1-2

北海道教育大学函館校 畠山研究室



ミミズリナンバー/最新号はこちら

10

